小田原の遺跡探訪シリーズ７

史跡石垣山（石垣山一夜城）
早川石丁場群関白沢支群

小田原市教育委員会

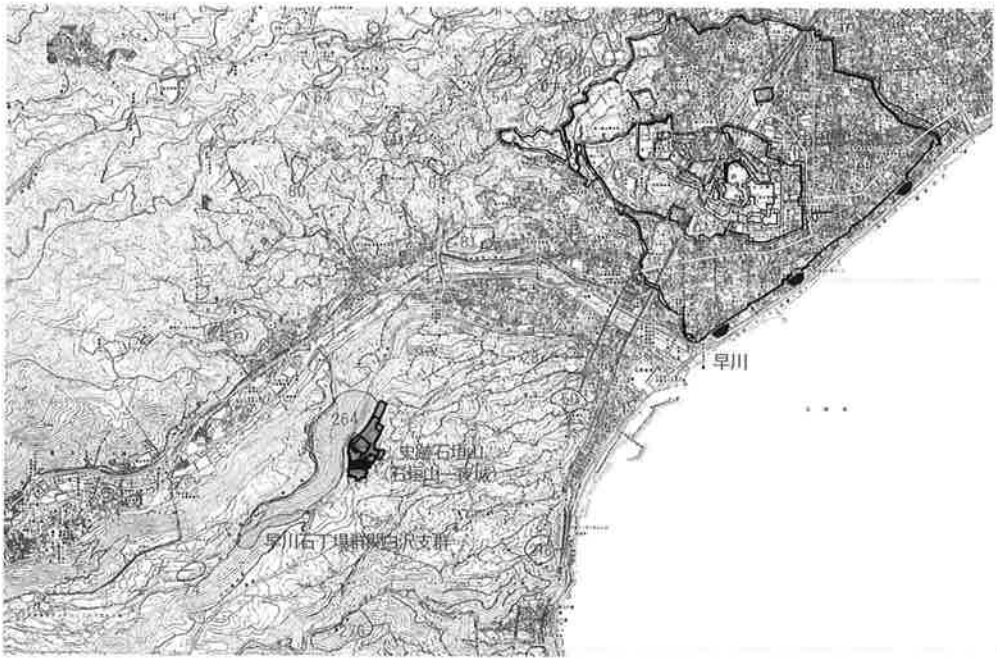
例　言

1　本書は、散策しながら遺跡が学べるガイドブック「小田原の遺跡探訪シリーズ」として作成しました。今回の第７号は、小田原市早川に所在する史跡石垣山（石垣山一夜城）（小田原市№84・227遺跡）と早川石丁場群関白沢支群（小田原市№264遺跡）を取り上げました。

2　本書の刊行は、平成23年度国庫補助事業である「文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」の一環として行いました。

3　本書の作成に関しては、以下の諸氏・諸機関からご指導・ご協力を頂きました。記して感謝申し上げます。（敬称略・順不同）
小笠原清、松井久、山口高志、御堂島正・伊丹徹（神奈川県教育委員会）、三瓶裕司（かながわ考古学財団）、神奈川県教育委員会、小田原市郷土文化館

4　本書の作成は、小田原市文化部文化財課山口剛志が担当者となり、同課大島慎一・小林隆・佐々木健策・渡辺千尋・土屋了介・吉田千沙子が補佐しました。図版の作成は、北條ゆうこの協力を得ました。



第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡（１/50,000）

［表　紙］　早川地区周辺空中写真（北から）（神奈川県教育委員会提供）

［裏表紙］　史跡石垣山（石垣山一夜城）出土文字瓦（左：「天正十九年」銘、右：「辛卯（かのとう）八月日」銘）（松井久撮影）

Ⅰ　遺跡の立地と環境

1　遺跡周辺の立地と環境

史跡石垣山（石垣山一夜城）および早川石丁場群関白沢支群は、箱根古期外輪山の一角をなす白銀山（標高933m）から北東方向に延びる丘陵の先端部に立地しています。丘陵の北西側は、早川によって侵食された急峻な斜面であり、スギ・ヒノキが植えられた山林が広がっています。南東側は、玉川などの小河川が流れる斜面地となっており、主に蜜柑畑として土地利用されています。そして、相模湾と接する部分は、海による侵食を受けて急激に落ち込んでいます。

また、この丘陵には、箱根火山の噴火によって形成された安山岩質溶岩が分布しており、蜜柑畑などでも大きな安山岩の転石を目にすることができます。現在でも、蜜柑畑の土手などの石積みにこの安山岩が利用されています。

このように、両遺跡は、地形の変化に富んだ丘陵部に立地しています。

写真1　史跡石垣山（石垣山一夜城）・早川石丁場群関白沢支群空中写真（北から）（神奈川県教育委員会提供）

2　周辺の遺跡

早川を隔てた北東側の主な遺跡としては、戦国時代に関東の雄であった小田原北条氏の本城であり、江戸時代には江戸城の西の守りとしての役割も担っていた小田原城が位置します（第１図）。その西方には、天正18年（1590）の豊臣秀吉との小田原合戦の際、小田原北条方の砦を豊臣方の細川忠興が奪取して陣場とした板橋富士山（細川忠興）陣場（No81遺跡）があります。

早川の右岸に目を向けると、海岸沿いの丘陵上には縄文時代の遺跡であるNo28・36・50・218遺跡が分布しています。この内、石橋日影遺跡第Ⅰ地点（No36遺跡）では、平成13年に試掘調査が行われ、縄文時代中期の竪穴住居跡１軒などが確認されています。この他、早川石丁場群関白沢支群（No264遺跡）の南西側に位置するNo74遺跡も縄文時代の遺跡として周知されています。

また、No244・245遺跡は、古墳～奈良・平安時代の遺跡として周知されていますが、発掘調査が行われたことはなく、遺跡の詳細な内容は不明です。

史跡石垣山（石垣山一夜城）（No84・227遺跡）の玉川を挟んだ南側には、早川石丁場群関白沢支群と同じく、17世紀の江戸時代に江戸城修築のための石垣用石材を切り出した石橋石丁場群玉川支群の遺跡があります（写真２）。ここでは、平成22年（2010）に広域農道小田原湯河原線建設に伴い発掘調査が実施され、安山岩の転石に石を割るための矢穴や、石工集団が何らかの目的で刻んだ刻印「十」が認められた石垣用石材が発見されています（大塚ほか2011）。

このような石垣用石材を切り出した作業場である石丁場は、早川・石橋地区周辺に数多く点在することが最近の調査で分かってきています。今後、これらの地区周辺での遺跡の増加が予想されます。

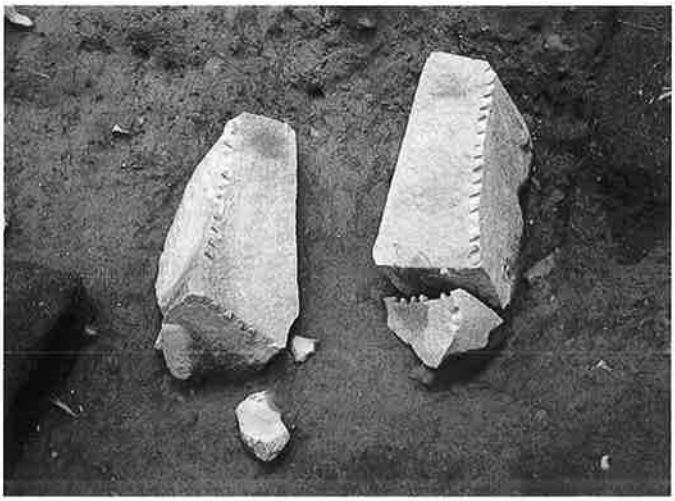


写真２　石橋石丁場群玉川支群３・８・９号矢穴石（北から）（大塚ほか2011）

Ⅱ　史跡石垣山（石垣山一夜城）

1　史跡石垣山（石垣山一夜城）の概要

史跡石垣山（石垣山一夜城）は、天正18年（1590）の小田原合戦の際、豊臣秀吉が関東初の本格的な総石垣の城として築いたものです。城の完成とともに周囲の樹木を切り払って、一夜のうちに城ができ上がったように小田原北条方に見せたという言い伝えから、石垣山一夜城とも呼ばれています。

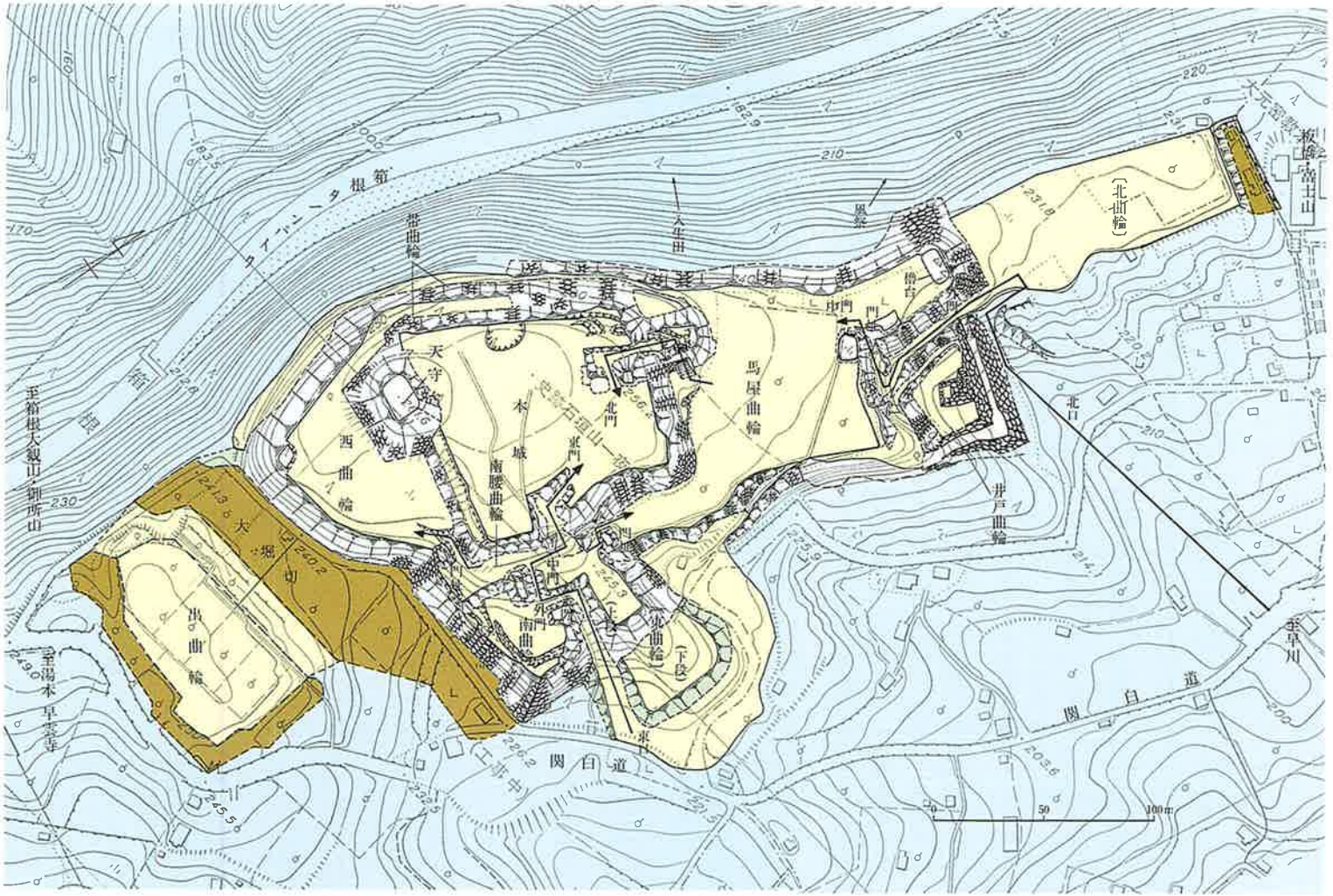
天正18年（1590）３月、天下統一を目指す秀吉は、22万人の兵を率いて小田原北条氏の支城を次々に攻め落とし、４月には小田原城を包囲しました。同時に史跡石垣山（石垣山一夜城）の築城にも取り掛かり、６月26日には本営を湯本の早雲寺から移しています（「家忠日記」）。

史跡石垣山（石垣山一夜城）は、標高261.9mの天守台を頂点とした東西270m、南北550mの範囲の丘陵上、小田原城を眼下に見下ろす位置に立地しています（写真３・４）。天守台が置かれた本城曲輪（本丸）北側に馬屋曲輪（二の丸）、南側に西曲輪、東側に南・東曲輪が配されています。また、馬屋曲輪北側には井戸曲輪と北曲輪（三の丸）、西曲輪南側の大堀切を隔てたところには出曲輪が存在します（第２図）。

昭和34年（1959）に北曲輪と出曲輪を除く部分が国史跡に指定され、昭和63年（1988）には史跡部分を小田原市が公有地化しました。公園整備後の平成２年（1990）には歴史公園として一般開放され、平成18年（2006）には追加指定が行われています。

写真３　史跡石垣山（石垣山一夜城）空中写真（西から）（小笠原清撮影）

写真４　本城曲輪から小田原城を望む（南西から）



第2図　史跡石垣山（石垣山一夜城）実測図（1/3,000）（小笠原ほか1995bに加筆）

2　東口城道と東曲輪

史跡石垣山（石垣山一夜城）へは、東の早川と西の湯本とを結ぶ関白道（現在の農道に相当）から入る構造となっています。城道（しろみち）としては、東口と北口の二つのルートがあり（第２図）、享保５年（1720）に描かれた「太閤御陣城相州石垣山古城跡」では東口を大手としていますが、北口を大手と考える研究者もいて、明確ではありません（小笠原ほか1995ｂ）。

東口城道は、駐車場側にある入口から南曲輪・南腰曲輪を経て本城曲輪へと至る現在の園路に相当します。北側に東曲輪、南側に南曲輪を見ながら切り通し状の道を入口から直進すると、南腰曲輪の石垣に突き当たります。途中大きな石垣が城道に崩れ落ちていて、さながら登山道のような風景です（写真５）。また、説明板の付近では、城道の脇に造られた石組水路の跡を確認することができます。

突き当りを南へ折れて南曲輪へ入るところには、東口外門がありました。この東口外門を過ぎると、すぐ西へ折れて東口中門のある南腰曲輪へと登ります。さらに南腰曲輪を北・西へと折れると本城曲輪東門に至ります。このように、東口城道は、東口外門・中門と本城曲輪東門の三つの門を通過して本丸である本城曲輪に至る構造となっています（第２図）。

東口城道の北側には、三段構造の東曲輪が展開しており、標高は上段244m、中段234m、下段228mを測ります。大きな段差を有しながら東口城道に沿って100m程細長く延びており、城道を防御する性格を備えていたことを窺わせます。また、東曲輪上段は、石垣を積んで構築されていることが確認されています。

写真５　東口城道（東から）

写真６　東口外門と櫓台（南から）

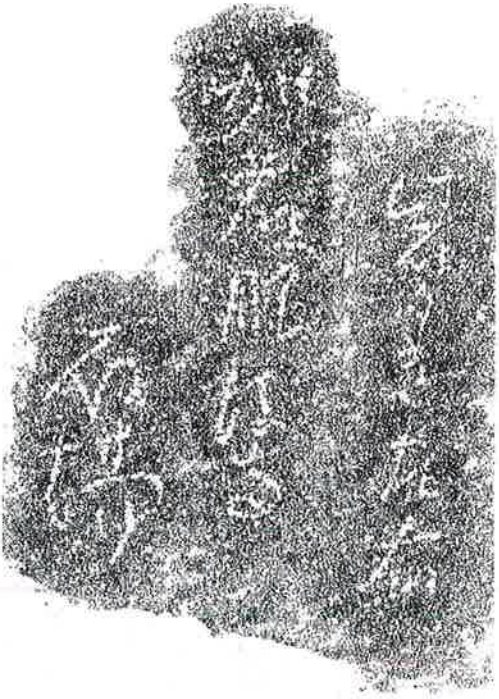
3　東口外門と南曲輪

東口城道から南曲輪に入ったところには東口外門があり、城道の東側には門の櫓台（やぐらだい）が残されています（第２図･写真６）。櫓台は、南曲輪面より１m程高く、残っている石垣の形状は北東－南西に長軸をもつ長方形の平面形を呈し、短軸は７m（４間）を測ります。門の道幅は、３間前後であったと推定されます。石垣の間から瓦が少量ながら出土することから、瓦葺の門であったことが想定されます。

東口外門を抜けると、標高242mを測る南曲輪があります（第２図・写真７）。東西35m、南北25m程の平坦面を有し、史跡石垣山（石垣山一夜城）の中で東曲輪とともに狭い曲輪の一つです。ここでの最大の見所は、南曲輪南面に残されている石垣です（写真８）。使われた石は、この周辺で多く産出される安山岩の転石で、小田原城の大きさが揃うように加工された石垣とは異なり、あまり加工を施さず大きさの異なる自然石を積み上げた野面積（のづらづみ）と呼ばれる高度な古い技法によって行われています。こ

写真７　南曲輪全景（西から）

写真８　南曲輪南面石垣全景（西から）



第３図　刻銘のある石垣拓本（大島1999）

れは、豊臣秀吉が近江（滋賀県）など西国の穴太衆（石工集団）を呼び寄せて積ませたもので、そのみごとなまでの高石垣の姿には圧倒されます。

4　東口中門と南腰曲輪

東口外門を通り抜けてすぐ直角に西側へ曲がったところが東口中門であり、先の「太閤御陣城相州石垣山古城跡」では大手門とされているところです（第２図）。城道の両脇には、南腰曲輪から東へ張り出した櫓台が確認できます。この内、北側の櫓台石垣は多くが崩れ落ちていたものの、長軸が北西－南東方向の８間×４間の規模であった可能性が高いと推定されています（写真９）。

また、注目される資料としては、北側櫓台から崩れ落ちた石垣に「此石可き左右加藤肥後守石場」と刻まれた銘文が確認されています（第３図）（大島1999）。これは、史跡石垣山（石垣山一夜城）廃城後の17世紀前半の江戸時代初期に、この一帯が江戸城修築のための石垣用石材を調達した加藤清正またはその子忠広の石丁場であったと推定することができ、石丁場の所有を示す標識石として石垣が利用されていたと考えられます。

東口中門を過ぎると南腰曲輪に入ります。南腰曲輪は、ほぼ南北に延びる東西10m、南北60m程の平坦面を有する細長い曲輪で、南曲輪より５m程高い標高247mを測ります。北側へ折れて進むと、西側に本城曲輪東門の枡形、直進すると馬屋曲輪に通じる南腰曲輪北門（写真10）、東側には東曲輪上段がそれぞれ位置しています。また、南側へ折れると西曲輪東門を通り抜けて西曲輪に至ります（写真11･12）。南腰曲輪は、各曲輪を繋ぐ重要な場所として機能していたと考えられます。

写真９　東口中門と櫓台（東から）

写真10　南腰曲輪北門と櫓台（南から）

5　西曲輪東門と西曲輪

南腰曲輪の南側の突き当りを西へ直角に曲がったところが西曲輪東門です（第２図・写真11）。現在、西曲輪で確認できる唯一の門跡で、南西側には門の櫓台が残されていますが、あまり形状を留めていません。櫓台東面には、１辺150㎝程の石垣が散乱していますが、その他の面では石垣が認められないことから、西曲輪東門は石垣を伴っていなかった可能性が指摘されています。

西曲輪東門を通り抜けると、南腰曲輪より４ｍ程高い標高251ｍを測る西曲輪が目の前に広がります。西曲輪は、北側を本城曲輪と天守台、南側を大堀切を隔てた出曲輪に挟まれていることから、城外からは見えない曲輪となっています。東西85m、南北50m程の平坦面を有する比較的広い面積の曲輪であり、曲輪の南西隅には曲輪面より70㎝程高い櫓台が確認できます。西曲輪は、大堀切に望む西側の守りを固める役割を担っていた曲輪と考えられます。

平成元年（1989）には、公園整備に伴って発掘調査による詳細分布調査が行われ、西曲輪は関東ローム層まで削り込んで曲輪面を造り出していたことが分かりました（塚田ほか1992）。また、南西隅の櫓台は、本来の姿を失っていたものの、瓦が出土したことから瓦葺の建物の存在が想定されています。

6　本城曲輪（本丸）と東門・北門

南腰曲輪北側から西へ折れて鍵の手状の掘り込みを登ると、そこが本城曲輪東門です（第２図）。鍵の手状の掘り込みには、本来石垣が積まれていましたが、現状では明確に確認することができません。東門は、本城曲輪東面の中央やや南寄りに構築され

写真11　西曲輪東門と櫓台（東から）

写真12　西曲輪全景（東から）

ています。

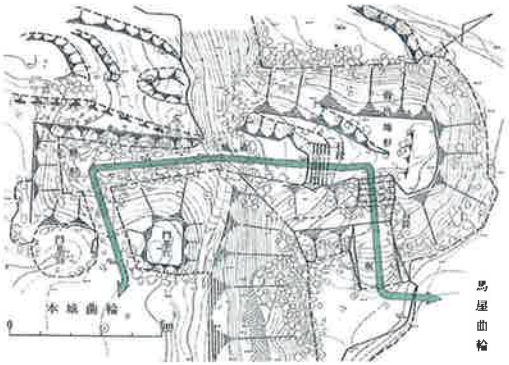
東門を抜けると、そこが本丸に相当する本城曲輪です（写真13）。史跡石垣山（石垣山一夜城）の中で最も面積が大きい東西105m、南北95m程の平坦面を有する曲輪で、標高は257mを測ります。ここからは、眼下に小田原城を見下ろすことができ、天正18年（1590）の小田原合戦の際には小田原北条方の動きが手に取るように分かったことでしょう（写真４）。

平成元年（1989）の詳細分布調査では、西から東に傾斜している地形に切土と盛土を行うことで曲輪面を構築していたことが分かりました（塚田ほか1992）。また、天守台寄りの本城曲輪南西側では、敷石を伴う建物の礎石が確認されており、何らかの施

写真13　本城曲輪全景（北から）

写真14　本城曲輪検出の敷石と礎石（東から）（塚田ほか1992）

写真15　本城曲輪北門枡形（北から）



第４図　本城曲輪北門平面図（１/250）（小笠原ほか1995ｂ）

設が建てられていたことが明らかとなりました（写真14）。

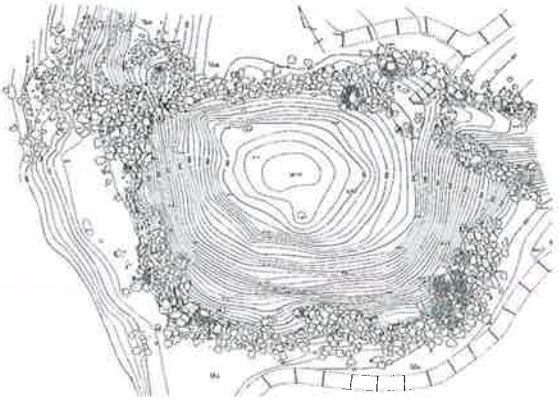
本城曲輪には、もう一つの門がありました。それが北門です（写真15・第４図）。北門は、本城曲輪北面の西寄りに構築されており、二の丸である馬屋曲輪に通じる北山城道のルートになります。本城曲輪の面から一段掘り下げた枡形部分と、テラス状の高台を馬屋曲輪側に張り出した部分から構成され、東国の城郭には見られない独特な形態を呈していますが、残念ながら多くの石垣が崩れ落ちて本来の形状を留めていません。また、本城曲輪から枡形へ降りる手前の両側には、門の基台と考えられる高まりが認められます。

7　天守台

天守台は、本城曲輪の南西隅から西曲輪へ張り出すように構築されています（第２図）。本城曲輪から４ｍ、西曲輪から10m高くなっており、標高は261.9mを測ります（写真16）。天守台の石垣はほとんど崩れ落ちていますが、東西に長軸をもつ長方形の平面形であったと推定されます。石垣には、一辺70～150cm程の石が使われていますが、本城曲輪と接する北東隅には比較的大きな石が確認できることから、この付近に門があったとの指摘もあります。

崩落した石垣の間には、夥しい数の瓦が出土していることから、天守には瓦が葺かれていたことが分かっています。天守の具体的な構造等は明らかでありませんが、年代的に見て岐阜県犬山城や福井県丸岡城の天守に近いものであったと想像されています。なお、後で説明する「天正十九年」の銘がある平瓦は、この天守台石垣から出土したものです（裏表紙写真左）。

写真16　天守台全景（東から）



第５図　天守台平面図（１/1,000）（塚田ほか1993）

8　馬屋曲輪（二の丸）と北口中門・北口城道

本城曲輪から北門をコの字形に降りた先が、二の丸に相当する馬屋曲輪です（第2図・写真17)。東西100m、南北80m程の平坦面を有し、本城曲輪に匹敵する広い曲輪であり、標高は243mを測ります。平成元年（1989）の詳細分布調査では、馬屋曲輪西端部で道路状の硬化面が検出されています（塚田ほか1992)。

馬屋曲輪に出入りするための門としては、本城曲輪北門、南東隅に位置する南腰曲輪北門、井戸曲輪・北口城道へ通じる北口中門の3箇所があります。この内、北口中門は、馬屋曲輪北側にある櫓台がこれに相当します（写真18)。櫓台は、馬屋曲輪の面より1.4m程高く、北西－南東に長軸をもつ長方形の平面形を呈し、15m×9m程の規模を測ります。「太閤御陣城相州石垣山古城跡」では、門の道幅が3間あったと記されています。

この櫓台の北側を東へ折れると井戸曲輪・北口城道へと至ります。北口城道は、史跡石垣山（石垣山一夜城）のもう一つの城道ルートです。北口城道は、本城曲輪から北門を通り抜けて馬屋曲輪へ入り、そこから馬屋曲輪北側にある北口中門を東へ折れた後、さらに北へ折れて井戸曲輪西側の帯曲輪状の平坦面を北上します（写真20)。そして、三の丸に相当する北曲輪と接する手前に北口外門があり、これを通り抜けて井戸曲輪石塁に沿って降りていくと関白道に辿り着きます。東口城道と同じく、本城曲輪北門と北口中門・外門の三つの門を通過しています。

なお、馬屋曲輪から南へ降り、東曲輪を経て駐車場に至る園路は、公園管理用の道路であり、当時は存在しなかった道です。

写真17　馬屋曲輪全景（北東から）

写真18　馬屋曲輪櫓台（南から）

9　井戸曲輪

馬屋曲輪北側にある北口中門を東へ折れて降りていくと、四方を石垣によって囲まれた空間が突如目の前に現れます。ここが井戸曲輪です（第２図・写真19）。

東西65m、南北50m程を測る井戸曲輪は、谷を堰き止めるように内外壁を石垣によって積み上げた石塁で北側と東側を囲み、西側と南側の斜面にも石垣が積まれています（第６図）。石塁の規模は、下端幅11.5～17.5m、上端幅5.8～7.0m、高さ約10mを測り、穴太衆の高度な技術が思う存分発揮されています。

井戸は、谷の湧水を利用したもので、現在でも雨の多い季節にはこんこんと水が湧き出ています。井戸の底から約5.8m上方の東・南・西側には、テラス状の平坦面を設けて螺旋（らせん）状の道を築くなど、水を効率良く汲むための工夫がなされています。なお、井戸曲輪へ至る本来の道は、北口中門から入る現在の園路ではなく、馬屋曲輪北東隅付近から入っていったと推定されます。

井戸曲輪の石垣は、史跡石垣山（石垣山一夜城）の中でも南曲輪南面石垣と並んで

写真19　井戸曲輪全景（南西から）（山口高志撮影）

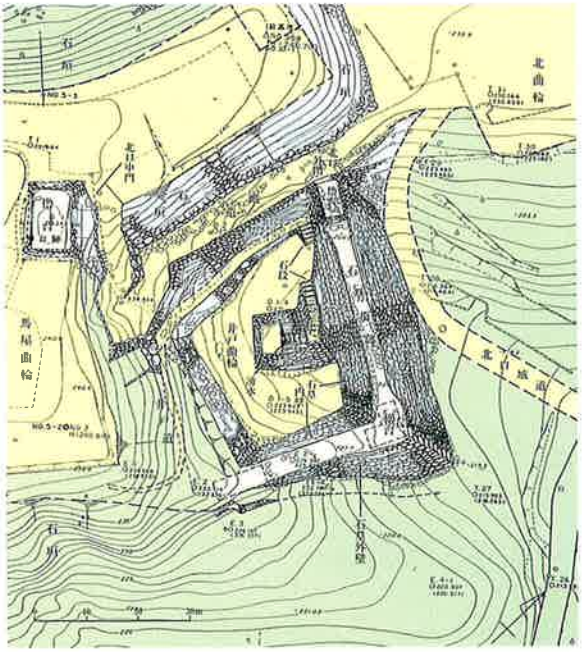
当時の面影を非常に良く残している場所ですので、是非訪れてみたい曲輪の一つです。

10　北曲輪（三の丸）

北口中門から井戸曲輪に至る途中、北へ折れて井戸曲輪西側の帯曲輪状の平坦面を北上すると北口外門に至りますが（写真20）、これより先が三の丸に相当する北曲輪になります（第２図）。

北曲輪は、東西50m、南北120m程の長方形を呈する平坦面を有し、標高は231mを測ります（写真21）。石垣は積まれておらず、北端には堀切が構築されています。

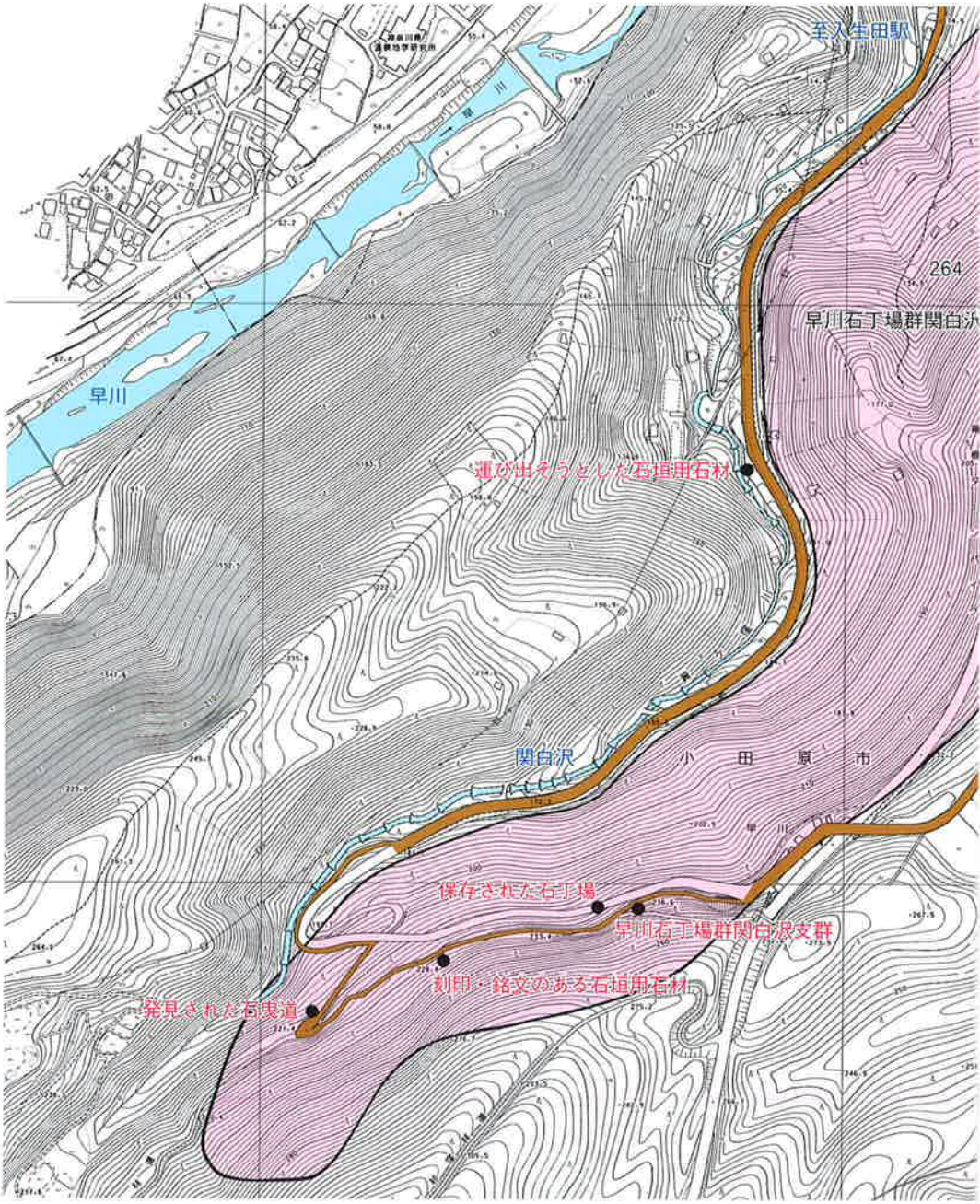
北曲輪は、民有地のため残念ながら見学することができませんが、馬屋曲輪展望台から眺めることができ、曲輪の輪郭を確認することができます。なお、北曲輪は、国指定史跡外になっています。



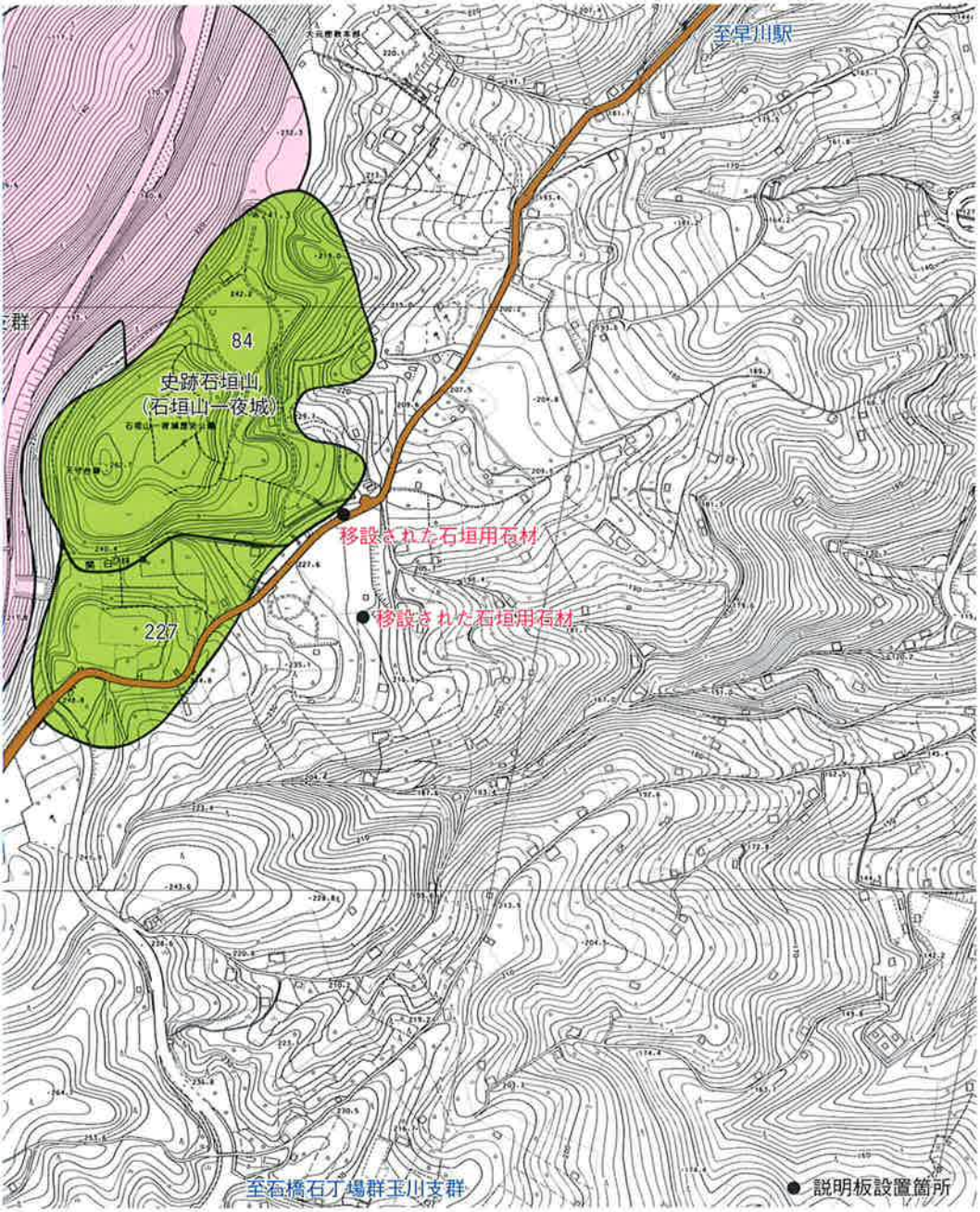
第６図　井戸曲輪平面図（１/1,500）（小笠原ほか1995ｂ）

写真20　北口城道全景（南から）

写真21　北曲輪全景（南から）



第７図　史跡石垣山（石垣山一夜城）・早川



石丁場群関白沢支群散策マップ（1/6,000）

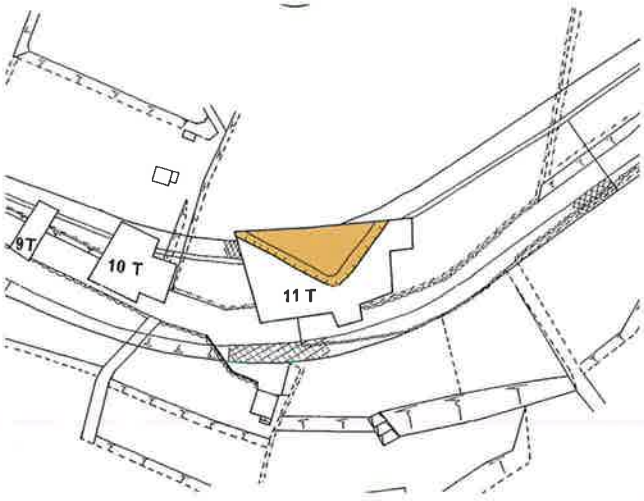
11　出曲輪

出曲輪は、南曲輪・西曲輪の南側にある大堀切を隔てたところに位置する曲輪です（第２図）。頂部には、東西100m、南北50m程の長方形を呈する平坦面が広がり、標高は252mを測ります。四方を堀によって守られており、北曲輪と同じく石垣は認められません。

この出曲輪では、昭和60～62年（1985～87）に農道拡幅に伴う発掘調査が断続的に実施された結果、出曲輪の南～東側に位置する南堀切の南東隅部分が確認されました（第８図）。堀は、外側法面と底面が確認されており、西から東へ延びたところで直角に北側へ屈曲していました。堀の深さは、最大4.4mを測ります。堀の幅は、周辺の地形的な現況から判断して約10mと推定されています。また、法面は、60～70°の急角度で立ち上がっています。

出曲輪は、石垣が積まれていないことや南堀切の屈曲する様子などから、史跡石垣山（石垣山一夜城）築城以前からあった小田原北条氏の砦を史跡石垣山（石垣山一夜城）の城域に取り込んだと指摘する声もあります。

なお、出曲輪は、北曲輪と同じく国指定史跡外です。また、民有地のため見学することができませんが、駐車場付近からはその姿を窺うことができます。



第８図　出曲輪南堀切平面図（１/600）（杉山ほか1991）

写真22　史跡石垣山（石垣山一夜城）出土軒丸瓦（松井久撮影）

12　史跡石垣山（石垣山一夜城）出土の瓦

史跡石垣山（石垣山一夜城）では、発掘調査による詳細分布調査や測量時の石垣清掃などによって、天守台を中心とする本城曲輪や各櫓台周辺から瓦が採集されています。中でも、平成２年（1990）に天守台で行われた測量調査に先立つ石垣清掃で採集された瓦は、軒丸瓦24点、軒平瓦23点、丸瓦約750点、平瓦約1,600点、鬼瓦１点の総数約2,400点もの数量でした（塚田ほか1993）。

軒丸瓦は、左巻き三巴文と珠文15個の組み合わせの文様です（写真22）。軒平瓦は、中心飾りの部分が三葉と五葉の文様が認められ、姫路城や大坂城など播磨系の系統を引く文様と考えられています（写真23）。また、丸瓦は、コビキＡと呼ばれる天正年間（1573～92）頃まで用いられていた技法で作られたものでした。

その他、注目される瓦としては、「天正十九年」の銘が焼成前にヘラ書きされた平瓦があります（裏表紙写真左）。史跡石垣山（石垣山一夜城）の築城が天正18年（1590）ですので、翌年以後も天守の造営が行われていたという驚きの事実をこの瓦が示しています。これに関連する資料としては、昭和36年（1961）に「辛卯八月日」銘の平瓦が同じく天守台から発見されています（第９図・裏表紙写真右）。辛卯は天正19年（1591）を指すことから、この瓦の発見者である久保田政男氏は当時から天正19年（1591）まで造営が行われていたことを指摘されていました。

また、史跡石垣山（石垣山一夜城）の瓦の胎土を分析したところ、静岡市安倍川付近より東の地域で焼かれていたことが明らかになりました（池谷ほか2011）。

写真23　史跡石垣山（石垣山一夜城）出土軒平瓦（松井久撮影）

第９図　「辛卯八月日」銘平瓦拓本（小笠原ほか1995ｂ）

Ⅲ　早川石丁場群関白沢支群

1　早川石丁場群関白沢支群の概要

早川石丁場群関白沢支群は、小田原市早川字箕ヶ窪外に所在し、小田原市№264遺跡として周知されています。その分布は、北東の史跡石垣山（石垣山一夜城）西側斜面から南西の小田原湯本カントリークラブゴルフ場までの面積約20ha、標高90～280mの広い範囲となっています（第７図）。

早川石丁場群関白沢支群は、箱根古期外輪山の一角をなす白銀山（標高933m）から北東方向に延びる丘陵の先端部に立地しており、この丘陵には箱根火山の噴火によって形成された安山岩質溶岩の転石が数多く分布しています。本遺跡は、この安山岩を利用し、17世紀の江戸時代に江戸城修築のための石垣用石材を調達した「石丁場」（石を切り出した作業場）として土地利用されました。

この石丁場の存在は、以前から地元で知られており、史跡石垣山（石垣山一夜城）の現況調査の際にも馬屋曲輪西側斜面に存在する矢穴が刻まれた石の報告がなされていますが（小田原城郭研究会1989）、遺跡として把握されるまでには至りませんでした。具体的にされたのは、平成15年（2003）に実施された分布調査であり（大島2003）、これにより小田原市№264遺跡として新規登録されました。

その後、平成17～18年（2005～06）に広域農道小田原湯河原線（市道2390）建設に伴う発掘調査が実施されました（写真24）。石を割るための矢穴や石工集団が刻んだ刻印を有する石垣用石材の他、石垣用石材を運ぶための石曳道が発見され、10区と呼ばれた調査区は、現地に保存されました（三瓶ほか2007）。

平成20年（2008）、小田原市教育委員会が分布調査を再び行って遺跡範囲を拡大し、平成21年（2009）に石垣用石材の一部を測量調査しました。そして、平成24年（2012）には、現地に保存された10区に散策路が小田原市によって整備され、一般に開放されています。

写真24　16区近景（上から）（三瓶ほか2007）

2　周辺の石丁場の分布

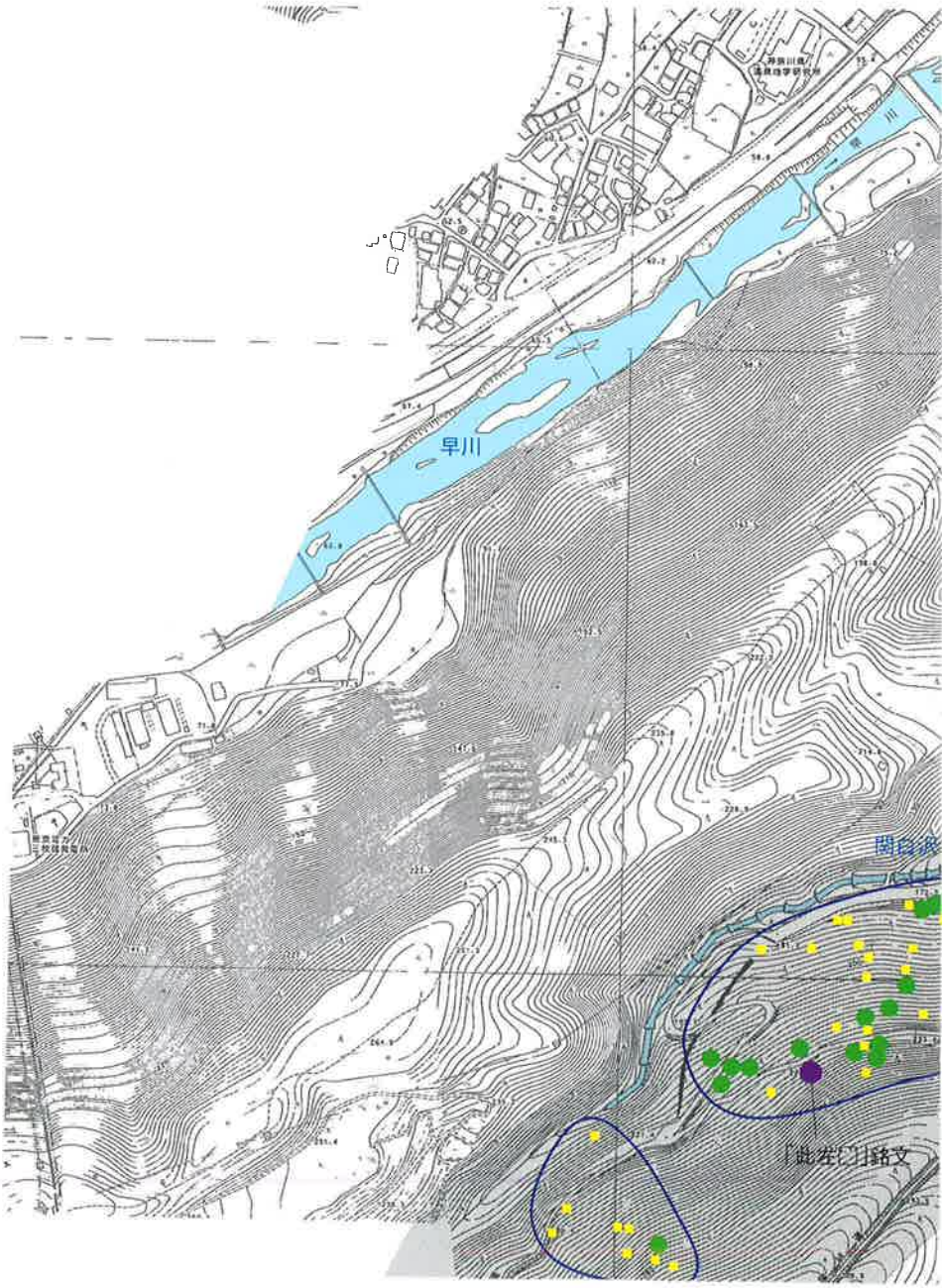
石丁場は、小田原を含む伊豆半島のほぼ全域に分布しています（第15図）。この内、江戸城修築のための石垣用石材を調達した石丁場は、硬質な安山岩を産出する小田原から真鶴・熱海・網代・伊東・河津にかけての伊豆半島東海岸が主な地域です。中でも熱海市・伊東市では、石丁場の調査が精力的に進められ、遺跡の具体的な内容が発掘調査報告書で明らかにされています。また、軟質で加工が容易な凝灰岩の石丁場では、建築・土木資材用の石材が切り出されていました。

小田原周辺の石垣用石材を調達する石丁場としては、早川石丁場群関白沢支群の北側に位置する南足柄市から小田原市久野・入生田にかけての地域と、本遺跡南側に位置する小田原市石橋・米神の地域に矢穴・刻印・銘文を有する石垣用石材が確認されています（江戸遺跡研究会編2010）。この他、文献史料から小田原市根府川・江之浦にも石丁場があったことが確認されています（大島1999）。

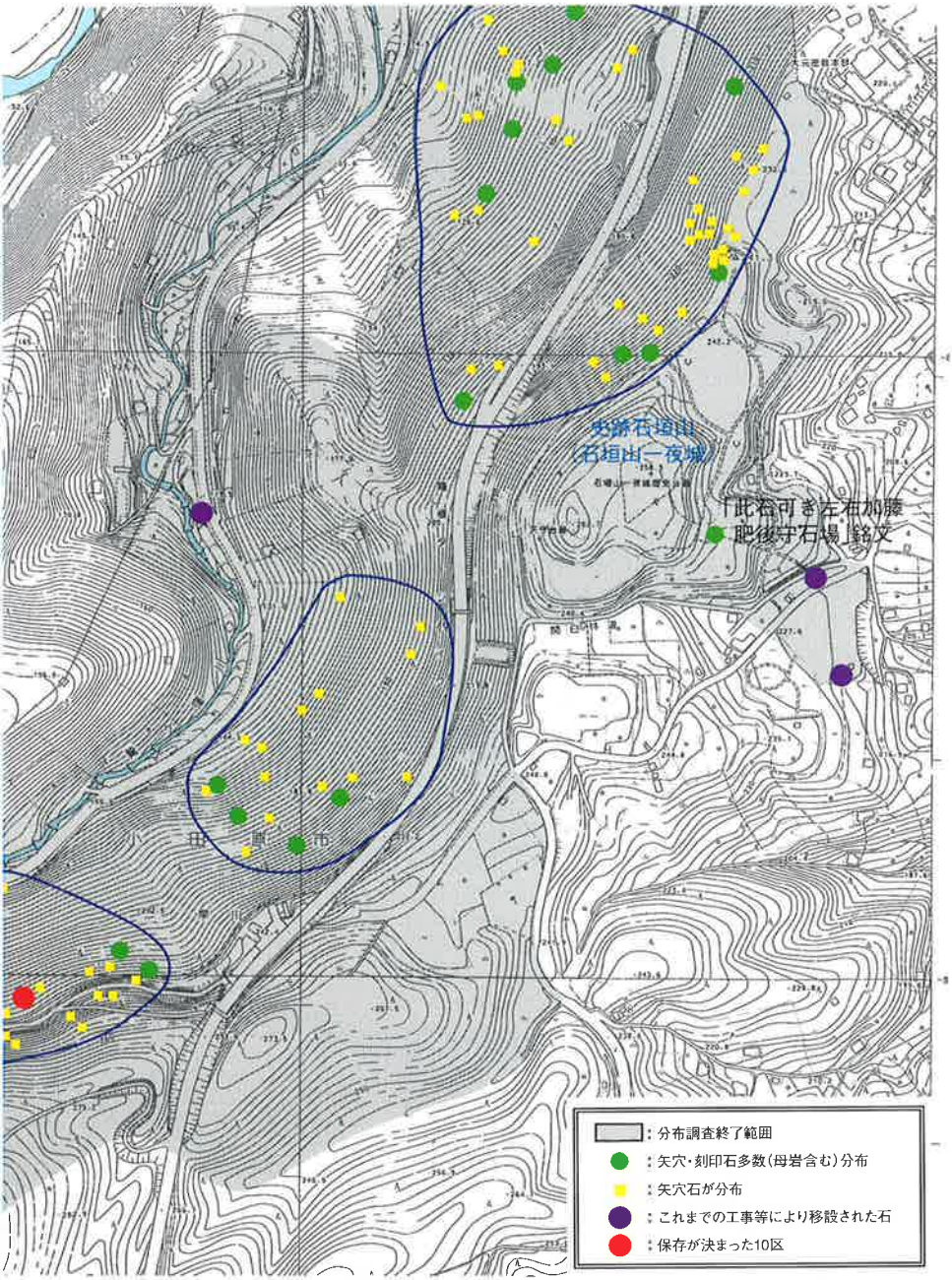
早川石丁場群関白沢支群周辺で石丁場の発掘調査が実施されたのは、本遺跡から800m南側に位置する石橋石丁場群玉川支群です。ここでも、安山岩の転石に矢穴や刻印「十」が刻まれた石垣用石材が発見されました（大塚ほか2011）。この発掘調査地点から東側の玉川流域や石橋地区の海岸でも、矢穴や刻印が刻まれた石垣用石材が点在しており（第10図・写真25）、石橋石丁場群玉川支群はさらに広い範囲に分布していると考えられます。今後、調査の進展によって新たな石丁場が発見される可能性が高い地域といえます。

第10図　石橋地区石丁場遺跡・石垣用材・矢穴石（1/40,000）（大塚ほか2011を改変）

写真25　石橋地区の海岸で観察される石丁場（大塚ほか2011）



第11図　早川石丁場群関白沢支群矢穴・刻印



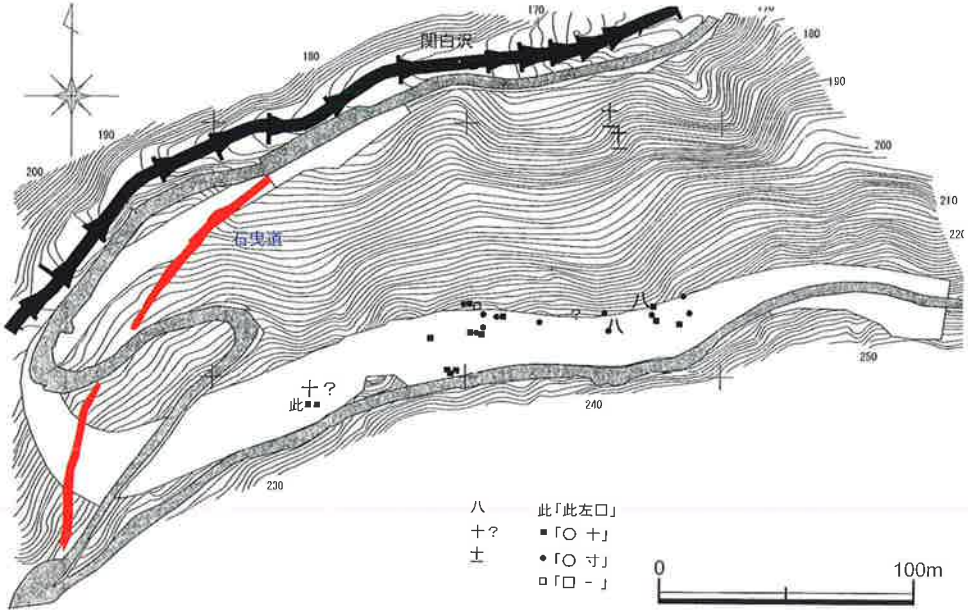
石分布図（1/4,000）（佐々木2008に加筆）

3　矢穴・刻印石の分布

早川石丁場群関白沢支群は、平成20年（2008）の分布調査によって矢穴や刻印が刻まれた石垣用石材が約20haの範囲で確認されており、大きな規模の石丁場であったことが分かりました（第11図）。この矢穴や刻印が刻まれた石垣用石材の分布を見ると、大きく４箇所に集中していることが分かります。

それは、史跡石垣山（石垣山一夜城）の北側一帯で南北に走る道路の東側から西側にかけて集中する箇所と、その南西側で等間隔に並ぶように３箇所の集中箇所が認められます。４箇所の集中箇所は、70～120m幅の石垣用石材が認められない空白部分を隔てて分布していることから、集中箇所が作業場としての一つの大きなまとまりを示していると推定されます。

この集中箇所は、石を切り出した時期の差なのか、または石の切り出し作業を行った石工集団の活動範囲を示しているのかなど、現段階では資料に乏しく明確ではありません。各集中箇所の矢穴・刻印・石垣用石材などを比較・検討することによって明らかになってくると思われます。今後の調査の進展が期待されます。



第12図　発掘調査区刻印分布図（１/3,000）（三瓶ほか2007に加筆）

4　刻印・銘文

早川石丁場群関白沢支群では、石を切り出した石工の集団が何らかの目的で刻んだ刻印や銘文が数多く確認されています。ここでは、平成17～18年（2005～06）に行われた発掘調査の成果を中心に紹介します（三瓶ほか2007）。

（1）　刻印のある石垣用石材

発掘調査で確認された刻印は、「八」２例（写真26）、「㊥」13例（写真28）、「㊦」11例（写真29）、「㊐」１例（写真30）の他、「十」と刻まれている可能性のある刻印が１例あります。また、調査区以外では、「土」の刻印が２例（写真27）確認されています（第12図）。

「八」の刻印は、石の自然面に刻まれていること、「八」の刻印が刻まれた石垣用石材を２石に割り、割った面に「㊥」の刻印が後から刻まれていること（11区７・８号石材）、「土」の刻印が存在することなどから、「八」の刻印は石の切り出し作業を行う前に石材の選定が行われた際、付けられた番号と推定されています。なお、11区７・８号石材は、史跡石垣山（石垣山一夜城）東口城道の入口前に移設され、見学することができます（第７図）。

次に、「㊦」の刻印をノミで打ち消して新たに「㊥」を刻んでいること（写真31）、「㊥」は「㊦」に比べて石質が悪い石材に刻まれていることが多いことなどの特徴から、石工集団が時期を隔てて作業を行っていた可能性もあります。石丁場での作業は、大名家から頭領一人に数百人の日用（石工以外の人）が従って行われていたため、このような刻印の刻み直し作業が生じたものと思われます。

「㊐」の刻印については、１例のみの確認であるので詳細は不明です。今後、同じ刻印が発見されることになれば、次第にその内容が明らかになると思われます。

写真26　刻印「八」（三瓶ほか2007）

写真27　刻印「土」（三瓶ほか2007）

写真28　刻印「㊥」（三瓶ほか2007）

（2） 刻印・銘文のある石垣用石材

21区から発見された6号石材には、2列の矢穴、上面左端に「㊥」の刻印とともに、斜面下方を向く前面左側に「此左□」の銘文が刻まれていました（第13図・写真32）。

「此左□」に類似した銘文は、約650m北東に位置する史跡石垣山（石垣山一夜城）の石垣から発見されており、「此石可き左右加藤肥後守石場」と刻まれていました（大島1999）。この銘文が加藤清正かその子忠広の石丁場を示す標識石と推定されることから、早川石丁場群関白沢支群で発見された「此左□」の銘文は、この周辺の石丁場をどの大名が所有していたのかを示そうとした標識石と推定されますが、残念ながら具体的なことは不明です。

なお、この刻印・銘文のある石垣用石材は、現在歩道部分に移設されており、見学することができます（第7・11図）。

写真29 刻印「㊥」（三瓶ほか2007）

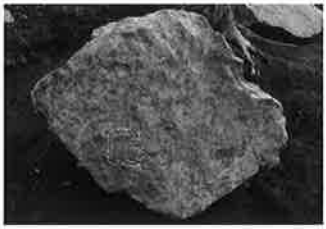
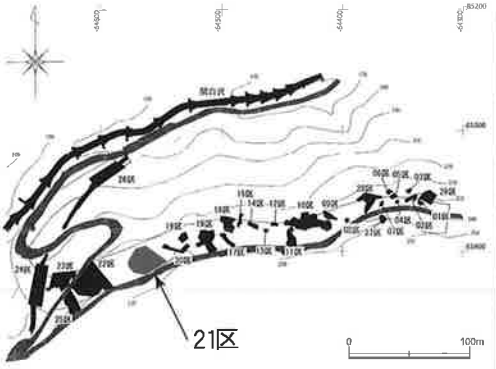


写真30 刻印「㊐」（三瓶ほか2007）

写真31 刻み直された刻印（三瓶ほか2007）



第13図 21区調査位置図（三瓶ほか2007に加筆）

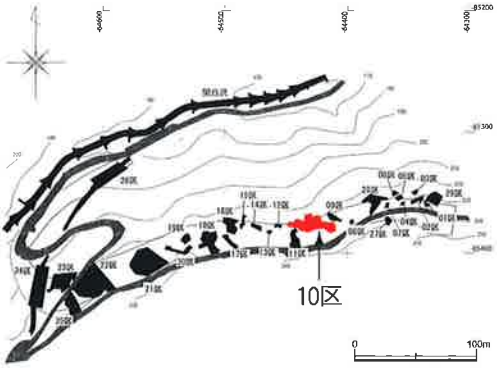
写真32 21区6号石材銘文「此左□」（三瓶ほか2007）

5　保存された石丁場

発掘調査が行われた10区は、最も規模が大きく保存状態も良好な石丁場であることが明らかになりました。このため、神奈川県教育委員会・小田原市教育委員会と事業者である神奈川県が協議を重ねた結果、神奈川県の協力によって橋を架ける設計に変更し、原状保存されることになりました（第14図・写真33）。

10区では、矢穴を彫って石材を割る直前の状態のものから整形が済んだ石垣用石材が集められた場所まで、石丁場の一連の作業工程を観察することができ、石丁場を理解する上で極めて重要な場所です。石垣用石材は、縦１ｍ×横１ｍ×長さ２～３ｍの大きさに整形している様子が窺え、刻印は「八」・「㊥」・「㊦」が確認されています。

平成24年（2012）には、原状保存された10区に小田原市によって散策路が整備され、一般に公開されています。



第14図　10区調査位置図（三瓶ほか2007に加筆）

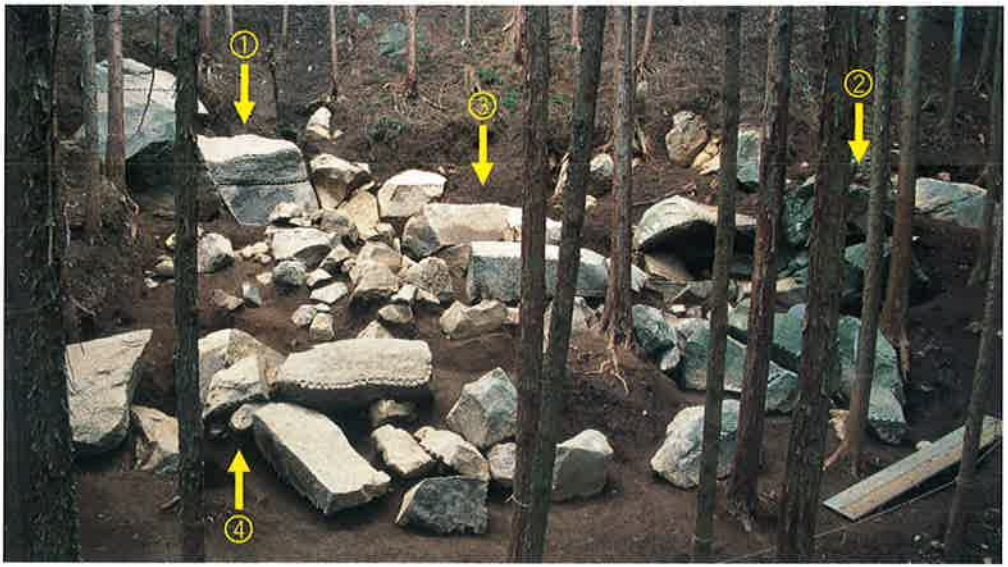


写真33　10区全景（北から）（三瓶ほか2007に加筆）

6　石切作業工程

原状保存された10区では、石丁場の一連の作業工程を観察することができます。

写真33の①の場所では、安山岩の転石を割るために矢穴が横一列に彫られ、割る直前の状態になっています（写真34）。下段の石垣用石材は、割った後の矢穴が認められることから、以前に一度切り出し作業が行われたことが分かります。

②の場所では、目的とする大きさに石を割った石垣用石材があります。ここでは、２石に割った後、一方をさらに３石に分割していた状態が観察されています。

③の場所では、切り出した石垣用石材の形を直方体に整える作業が行われており（写真36）、写真35のような光景で整形作業が行われていたと思われます。刻印は、この工程時に刻まれたようです。

④の場所では、整形が済んだ石垣用石材が集められていました。

このように、10区では、つい昨日まで作業を行っていたかのような生々しい作業場の姿が目の前に拡がっており、切り出しの作業工程がとても良好な状態で残されています。

写真34　10区①の割る前の石材（北西から）（三瓶ほか2007）

写真35　「石切図」屏風の整形作業の様子（小田原市郷土文化館蔵）

写真36　10区③の整形作業が行われている石材（北から）（三瓶ほか2007）

7　石曳道

早川石丁場群関白沢支群では、石丁場から石垣用石材を運び出すための石曳道（いしびきみち）が調査区の西端で長さ175mにわたって残されていました。発掘調査は、この内24・26区の合計52.5mの範囲で行われました（第12図）。

発掘調査された石曳道は、斜面を切り通し状に掘り込み、南西から北東に緩やかに東側へ曲がりながら下っていました。規模は、掘り込みの幅が3.54～4.46m、路面の幅が1.21～1.57m、深さが0.92～2.16mを測ります（写真37）。

路面は、傾斜角11.8～15.3°、平均13.7°であり、石材の運搬を考慮したほぼ一定の傾斜角となっています。また、路面には、轍（わだち）と推定される平行する2条の溝が0.67～0.89mの間隔で延びており、溝の中には小礫などが多く混入していました。

石曳きの様子は、江戸時代末期の作品とされる「石切図」屏風（小田原市郷土文化館蔵）が参考になります（内田2001）。石の切り出し作業（写真35）から船による運び出し作業（写真39）までの様子が詳細に描かれており、石曳きの様子は写真38のように地車（じぐるま）などと呼ばれる石材を運ぶ荷車を人や牛で運んでいるのが描かれています。

車輪の付いた地車は、斜面を降ろす際に用いるもので、発掘調査で確認された轍と推定される溝は、この地車を曳く際に車輪がはまらないように工夫されていたためであると考えられます。

このように、早川石丁場群関白沢支群の石垣用石材は、石曳道を利用して江戸城へと運び出されていたことが発掘調査によって明らかになりました。

写真37　24区石曳道全景（北東から）（三瓶ほか2007）

写真38　「石切図」屏風の石曳きの様子（小田原市郷土文化館蔵）

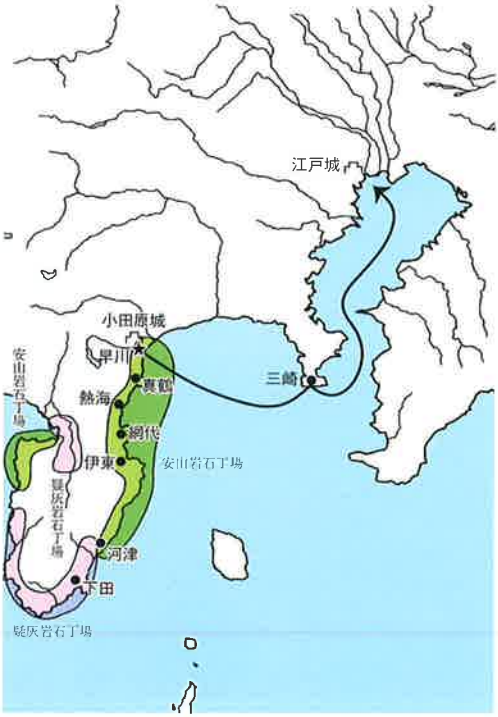
8　運び出し

早川石丁場群関白沢支群の石垣用石材は、石曳道を使って早川へ運び出され、早川の河口から石船と呼ばれる船によって海上ルートで江戸城へ運ばれたと推定されます（第15図）。「石切図」屏風では、海岸から房丁（ぼうちょう）と呼ばれる石専用の艀（はしけ）を使って石材を積み込んでいる様子が描かれています（写真39）。早川の河口でも、このような方法で石船に積み込まれたと考えられます。

また、早川石丁場群関白沢支群の北西側を流れる関白沢では、改修工事の際にきれいな直方体に形が整えられた石垣用石材が発見されています（写真40）。早川石丁場群関白沢支群から江戸城へと運び出す途中、何らかの原因で関白沢に落としてしまい、そのまま放置されたものと推定されます。現在２石が市道2390沿いに移設され、保存されています（第７図）。

写真39　「石切図」屏風の房丁に石垣用石材を積む様子（小田原市郷土文化館蔵）

写真40　運び出し途中で放置された石垣用石材



第15図　江戸城への運び出しルート（金子ほか2003『石垣普請の風景を読む』を改変）

文　献

本書を作成するにあたり、引用または参考にした主な文献を掲載しました。史跡石垣山（石垣山一夜城）・早川石丁場群関白沢支群をさらに詳しく知りたい方は、参考にしてください。

［史跡石垣山（石垣山一夜城）］

池谷信之ほか　2011　「〔特別報告〕石垣山城・近世小田原城出土瓦の胎土分析」『平成23年小田原市遺跡調査発表会発表要旨』小田原市教育委員会

大島慎一　1999　「資料紹介　史跡石垣山一夜城跡発見の加藤肥後守銘金石文について」『小田原市郷土文化館研究報告』№35（人文科学№18）、小田原市郷土文化館

小笠原清ほか　1995ａ　『小田原城』歴史群像名城シリーズ⑧、学習研究社

小笠原清ほか　1995ｂ　『小田原市史』別編城郭、小田原市

小田原城郭研究会　1989　「国指定史跡　石垣山一夜城跡現況調査報告」『小田原市郷土文化館研究報告』№25（人文科学№13）、小田原市郷土文化館

杉山幾一ほか　1991　「石垣山一夜城出城南掘切」『埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』小田原市文化財調査報告書第32集

塚田順正ほか　1991　『史跡石垣山Ⅰ』小田原市文化財調査報告書第35集

塚田順正ほか　1992　『史跡石垣山Ⅱ』小田原市文化財調査報告書第38集

塚田順正ほか　1993　『史跡石垣山Ⅲ』小田原市文化財調査報告書第44集

［早川石丁場群関白沢支群］

内田清　2001　「足柄・小田原産の江戸城石垣石－加藤肥後守石場から献上石図屏風まで－」『小田原市郷土文化館研究報告』№37（人文科学№19）、小田原市郷土文化館

江戸遺跡研究会編　2010　『江戸城・城下と伊豆石』江戸遺跡研究会第24回大会発表要旨、江戸遺跡研究会

大島慎一　2005　「早川地内における分布調査」『平成14年度試掘調査（２）』小田原市文化財調査報告書第128集

大塚健一ほか　2011　『石橋石丁場群玉川支群』かながわ考古学財団調査報告266

佐々木健策　2008　「事例報告　小田原市内の石丁場について」『発掘調査成果発表会・公開セミナー発表要旨』財団法人かながわ考古学財団

三瓶裕司ほか　2007　『早川石丁場群関白沢支群』かながわ考古学財団調査報告213

小田原の遺跡探訪シリーズ７

史跡石垣山（石垣山一夜城）

早川石丁場群関白沢支群

平成24年３月22日　印　刷

平成24年３月29日　発　行

編　集　小田原市教育委員会

発　行　〒250-8555　小田原市荻窪300番地

電　話　0465-33-1715

http://www.city.odawara.kanagawa.jp

E-mail:bunkazai@city.odawara.kanagawa.jp

印　刷　株式会社アルファ